

人はチームで磨かれる〜齋藤孝さんかひびく〜

組織局長 岡本 美穂

何年か前の全国フォーラムで齋藤孝さんのご講演を聞きましたが、テレビの印象通りで面白く、何よりも「やる気」をもらえるご講演でした。まさに参加者が一体となる雰囲気があるところにはありました。自由な雰囲気・・・齋藤さんもしきりに雰囲気の話がされています。その中でも、これから紹介する一冊にはそのことが詳しく書かれています。

「そもそも『学ぶ』というには、命令系統とは対極にある、自由な雰囲気がある。」

「よんだ雰囲気集団を変えていくことができれば、その人は教師として教育力があるというところになるだろう。」

◆学級経営について本から学ぶ

学級づくりや生徒指導にとって大事にしていかなくてはならないものは、「教師の雰囲気」です。学級の空気を読み、空気を

変える技術を身につける必要が教師にはあります。つまり、自分の資質の中からリーダー的なものを引き出していく必要があるということです。その一つが「教師の雰囲気」作りです。これは学級の空気を読んだ上で、それを好転させる工夫を毎回行っているのです。よんだ雰囲気集団を変えていくことができれば、その人は教師として教育力があるということになると考えています。これは、感性とも言い換えることができるのですが、この部分をどう伝えていくべきなのでしょう。

このようなことについては、突き詰めて考える機会などなく、感覚で行っている先生方が多いものです。もちろん私自身もその一人でした。そういった感覚で行っていることをどのように言語化して伝えていくべきなのか悩むことが増えてきました。そこで実践したことは、一緒に生徒指導をしながら雰囲気を実際に感じてもらう。

そして具体的にどんな言葉がけをしているのかを体験してもらったことでした。一対一の個別指導などは見てももらう機会がほとんどありません。齋藤さんはこのようにも語っておられます。

「ほんとうに優れた先生とは、自ら直接何か手を下さなくても、生徒たちがやる気になり、よくなっていく。そういうシステムや空気をつくることのできる人だ。ほんとうに人は場の雰囲気次第で変わる。人は環境の産物である。これは、確信をもっているが、個人の才能より環境の選択こそ重要なのだ。」

「ほめる」「叱る」は人それぞれのやり方があります。もちろん、本で読んで学ぶこともできますが、その場の空気をどう作り出しているのかを感じることは難しいものです。「雰囲気」というものが教師にとっては大切だということを伝えていきます。

◆子どもとの関わり方について本から学ぶ

「重要なのは、チームのメンバーがシステムやルールを作る」と、あるいは意識を変えらるることだ。そしてそれを『伝統』とし

ていく。つまり、どんなチームでも工夫によって『勢い』をつける」とはできないのである。」

この、意識を変えることに、高学年は苦労することが多いものです。具体的にこのようにも主張されています。

「チームができてくると、学生たちの中に、レポートをサボるものはまずいない。迷惑をかけたくないという思いもあるだろうが、それ以上に、できれば自分の意見を主張したいし、他のメンバーをあとと言わせたいという『競争心』もあるから、レポート作成には必然的に熱が入る。その時点で、チームに貢献しようという意識はかなり高まるわけだ。」

久保先生が良く言われる、子どもは、競いたがる、ということにつながるでしょう。その競争心が、チームに貢献ということになるのです。サークルでも同じではないでしょうか。サークルを盛り上げるためには、ちよつと上の手の届きそうなライバルを自分で作り盛り上げていくことです。そしてチームに貢献し愛することを教えるにつながつていくのではないのでしょうか。

◆教師としての在り方を本から学ぶ

「私は、気を放ったり、気に感応したりする訓練をしてきたが、そこまでしないまでも、『氣の交流』を心がけることくらいはすぐにもできる。私たちは、身体の次元でお互いを感じ取っている。大きな声で挨拶したり、俯かずに笑顔で接したりすることを、私もたちは、無意識のうちにコミュニケーションの基本と考えている。つまり、私たちは、身体生が重要であるということを理解しているわけだ。ならばもう一歩進めて、チーム全員が一定レベル以上の身体生を持つよう努める必要がある。その一つが、意識的に身体を相手に向けることなのである。」

「およそ成功する企業経営者は、勝つという雰囲気醸し出している。表情や声の張り具合に本質的な明るさがあるからだ。言い換えるなら、私たちは表情や声から、その人のバイタリティや将来の可能性を感じ取っているわけだ。それによって私たちが判断や行動を変

えるとすれば、いかにリーダーの身体生が重要かがわかるだろう。ただし、そこに一本の信念やロジックが通っていないければ、ただのパフォーマンスになってしまう」

ここは、リーダーを教師として読むとよりわかりやすくなります。パフォーマンス、つまり技術や方法論でとまってしまうと、結局自分のための教育となってしまうものです。

斎藤孝さんの信念は、「人は、人との関わり、とりわけ目標を持ったチーム（仲間）によって磨かれ成長していく」（p.28）という言葉に端的に表されているように、本書は、健全なチームを作るためのポイントを、教育学、身体論、コミュニケーション論の観点からまとめたものです。個の「集団」を「チーム」へ変貌させるためのコツがわかりやすい語り口でまとめられています。人を磨き、成長させるチームを作るためのポイントをまとめた本です。

二学期に入り、ステップアップするために読んで頂きたい一冊です。